

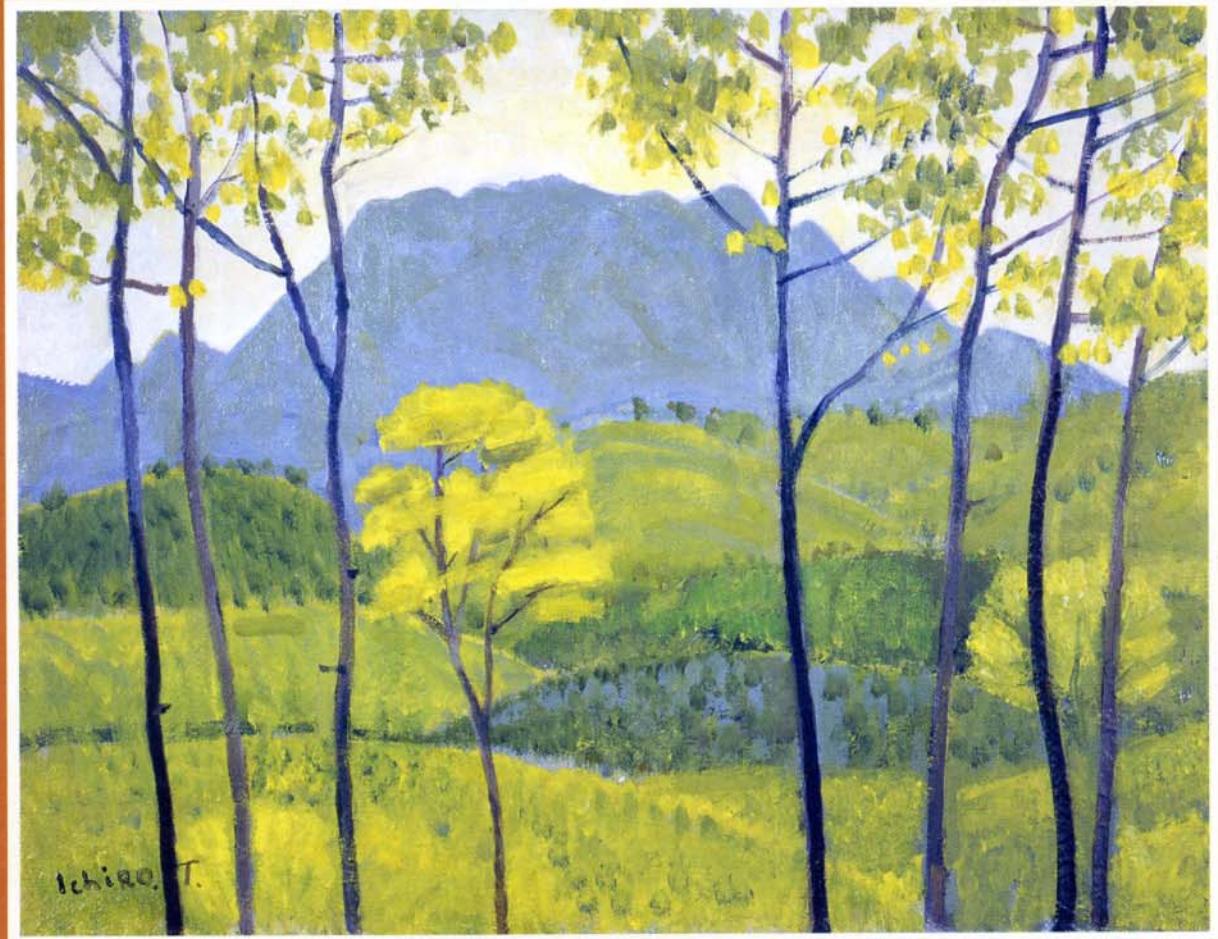
# 柞乃杜

秩父神社社報

柞乃杜(ははそのもり)

第 25 号

平成14年7月20日  
(川瀬祭)



ICHIRO. T.

声透るなり

啼くほとぎす

こもらひて

流れの音は

渓深き

時鳥

## 子らの夏まつり

秩父なるこの山里の 里びとの母なる神の 神さびた ははその杜に  
今宵また 夏のきかりに うまし子ら 勇みて集ふ

杜はいま いのちに満ちて 深みどり ゆにはを包む  
今宵こそ 夏のひととき 子らの曳く標しるしの山の 競ひあひ ゆにはを埋うづむ  
時みちて 夕やみのなか 日の御ひ崎みさき すさのをの神  
いとし子ら 病みてならじと 子らのまつ ゆにはに立たす

昔より 子をもつ親の まな子なる我が子のいのち 神にも祈る  
今もなお 尊きいのち 摺るぎなく 健やかなれと 神に祈らむ

### 反かへ歌しうた

深みどり ゆにはに満ちて わらべらの 声さはに立つ 祭りなりけり

## 解説 秩父神社(24)

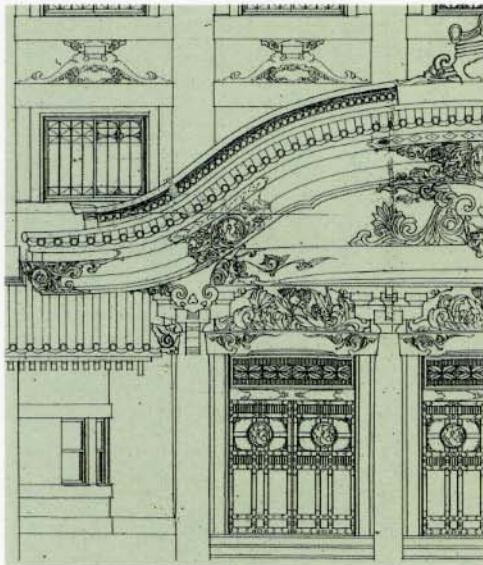
彩の国名工會々長

坂本才一郎

### ◆秩父神社神門の設計

神門の彫刻や飾金具の文様は岡田信一郎という美術学校（現在の東京芸術大学）の先生が描いたという話は、棟札の工匠、齋藤宇十郎や井上眞太郎たちが当時を回顧し話してくれた。

大正から昭和初期の代表的建築家、評論家、岡田信一郎とい



『建築工藝叢誌』(二十二卷)

に一等から三等までの設計図が掲載され、帝國大学名誉教授、工学博士、辰野金吾氏が「大阪市公会堂設計図案概評」と題し解説しているが、一等の岡田の設計については、「若い、枯れていない」のひとことで、外部の人

の時評では費用を配

つても「ピン」と来ないであろうが、東京の歌舞伎座の設計者と聞けば納得する人も多いと思う。

岡田は東京芝の生まれで、明治三十九年東京帝大を優等で卒業して恩賜賞を受賞し、同四年美術学校講師となつたが、一早稻田大学講師となつたが、一躍、岡田を有名にしたのは大阪市公会堂設計競技審査会から、

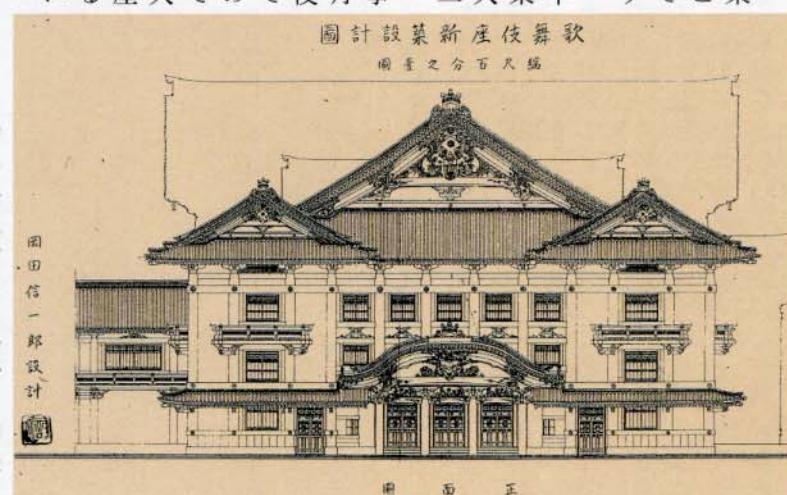
一等、岡田信一郎、二等、長野宇平治、三等、矢橋賢吉と発表され、岡田が先輩を抜いて一等となつた。

歌舞伎座は、大正十一年六月着工、大正十二年関東大震災で大屋根が陥没、大正十四年一月竣工、昭和二十年五月空襲により戦災、昭和二十四年九月改造工事着工、昭和二十五年十二月竣工、これが現在の歌舞伎座である。掲載した図版で

見るよう、正面では屋根の中央は大きな入母屋造りで豪壮な構えであつたが、大屋根陥没の前例もあり、屋根を軽量にするため見える部分は瓦葺とし、見えない部分は陸屋根に改造した。他の外部は、ほぼ岡田の設計した当初のままである。また部分拡大図で正面を飾る唐破風の玄関に注目されたい。棟唐戸や組子欄間がよく調和しているが、一等の岡田の

設計については、「若い、枯れていない」のひとことで、外部の人

の時評では費用を配



## 「鎮守の森」を現代に問う

— 社叢学会の発足に臨んで —

宮 司 蘭 田 稔

その名も「社叢学会」という、日本の森を多角的に学問する学会が発足した。先月二十六日の日曜日、文字どおりの五月晴れに新緑あざやかな京都・下鴨神社の社叢「たどすのもり（糺の森）」の一角を会場に設立総会が開催されたばかりである。

会員には、歴史学、民族学、宗教学から都市工学、造園学、林

学、生態学など幅広い領域の学者を中心に、伊勢神宮、熱田神

宮、明治神宮などの神社界や清水寺、總持寺などの仏教界の代表も顧問や理事に名を連ねるなど、やがては全国の社寺関係者や地方の有識者にも広く参加を呼び掛けるかまえである。当面は、大阪と東京に事務局を設けてすでに研究会活動を始めており、今年度は全国に八ヶ所ほどの地方都市に調査地域を設定して、それぞれに支部を結成しながら実際に地域の社寺林すべての現地調査をはじめることにしている。

社叢とは、いわゆる「鎮守の森」をいう。一般には、日本の町や村の集落ごとに鎮座する神社の森である。文部省唱歌の「村まつり」に「村の鎮守の神さま」とあるように、かつての日本人には子供のころの祭りや

遊びの記憶に懐かしい、ふるさとの景観でもあつた。ところが、この森が近年いちじるしく数を減らしたり、痛め付けられたりしている。特に都会の社叢が

深刻である。道路に削られ、下水道に水脈を断たれ、過密な家屋や高層ビルに囲まれて瀕死の状態にある森がまことに多い。田舎や山間部にある神社でも、道路の開削や河川改修や圃場整備などの大規模な土木工事の犠牲になつて、いたるところで見受けられる。かつては地元の住民たちが地域の守り神が鎮まる森として大切に保全してきた社叢が、いまは便利な生活のために破壊されつつある。

端的にいえば、こうした社叢の衰退は、いまの日本人がかつての郷土愛を見失い、地域生活の守り神を信心する習慣を捨てつつある結果ともいえよう。しかしながら、大半の若者がいまでも初詣でに全国の神社を参拝し、郷土の祭り行事には勇んで神輿をかつぐのを見ると、必ずしもそう断定するわけにもいかない。むしろ見方を変えれば、神信心はともかくとして、いまの日本人にとっても神社に森があることが余りにも当たり前でありすぎて、

その本来の意味や価値に気づくことがないともいえるのではないか。現代のわれわれが、つい最近まで国土の豊かな自然を当たり前のものと過信してその破壊を座視してしまい、きれいな大気や豊富な水に恵まれすぎてその保全



当社本殿

を怠つたのと、あるいは同じではないか。そうであれば、まずは豊かな森に神々が鎮まることの意義を問うのが先決だろう。

豊かな森や幽すいな自然に何かしら畏れと慎みを感じ、そこに息づく神靈が宿ると直感するのは、昔も今も日本人の変わらぬ感性である。古代の先人は、そこに注連縄を張り、

あるいは鳥居を立てた。それが神社の始まりである。日本語の力ミは語源的に動詞のクム（隠れる・籠もる）や名詞のクマ（隈・蔭）に由来し、本来は姿かたちの見えない生命の靈性である。清らかで豊かな自然に宿り、山や水源に籠もる神々であるからこそ、人里に迎えた里宮も社殿を包む森こそが神社の形であった。万葉集や古風土記で「神社」をモリと読み、「杜」とも表記したのも、その故であつた。

日本古代からの森林文化を研究した米国の若き林学者が近年にその成果をまとめた本の書名に「みどりの列島」と題したように、いまでもわが国土の68%を森林が占めているが、その実態は林業の衰退で荒れ放題といえる。その影響で、全国の河川から海への植物プランクトンが激減し漁場が荒廃している。漁師たちがいう「磯焼け」である。

日本の森は、鎮守の森がかつてそうであつたように、多種多様な植物や動物が共生して豊かな水源と土壤を形成してきた。その意味で森は、全生命の母胎なのであつた。



柞の森と

（本稿は、去る六月二十四日付読売新聞夕刊に掲載された論稿の原文です）

#### 【表紙解説】

時 鳥

涙深き 流れの音は こもらひて  
啼くほどござす 声透るなり

表紙の歌は、秩父市上町にお住まいの柿堺欣一郎先生の歌集『青垣山』より掲載させていただきました。

また、表紙絵は、第二回はそのもり美術展でも出展していただきました秩父郡吉田町にお住まいの寺井一朗先生の作品であります。吉田町と小鹿野町の丘陵地帯にまたがるところに「みどりの村」という施設があります。

春は新緑、秋には色鮮やかな紅葉、そして、小鳥や昆虫とも触れ合うことができるまさに、自然を肌で感じることのできる素晴らしいところです。寺井先生は、春の訪れの早かつた今年、このみどりの村を訪れ、ここから見る両神山を描かれました。そして「新緑の頃」と題されるこの作品を、この度の表紙絵に選んでいた

いまや地球の温暖化を防ぎ、生物の多様性を保全するためには、大気中の二酸化炭素を吸収し全生命の母胎となる森林を守り育てることが世界中の課題となつた。

あたかも日本古来の鎮守の森が、人間と自然の共生する文化として再認識さるべき理由も、ここにあるのだ。

## 伊勢神宮大宮司御来秩

去る二月二十日・二十一日の両日に亘り、市内ホテル美やまを会場に、東京・関東地区の神職、二百余名の参加のもと、「都七県神社庁連合総会」が開催されました。

来賓として、伊勢神宮より北白川道久神宮大宮司様が初めての御来秩という事もあり、ご多忙な日程の合間をぬい、当秩父神社を正式参拝後、井上大総代



した。子爵の山並みに深く感銘を受けられた夕暮れの秩父子爵の山並みと街並みに深く感銘を受けられた夕暮れの秩父子爵の山並みから一望され、羊山公園内「やまとーあー

とみゅーじあむ」では富田大総代の出迎えを受けられました。

各所、短い時間での探訪ではありましたがあつたが、数々の事に関心を寄せられ、中でも羊山公園



の案内で市内探訪をされました。

「秩父まつり会館」を皮切りに、次に訪られました才一プロ

ン間もない「ちちぶ銘仙館」では秩父銘仙の染め織りを体験され、羊山公園内「やまとーあー

とみゅーじあむ」では富田大総代の出迎えを受けられました。

各所、短い時間での探訪ではありましたがあつたが、数々の事に関心を寄せられ、中でも羊山公園

したが、武島新会長・新役員の方々は新世紀に新スタート出来ますことは誠に喜ばしい次第です。在任中を振り返ってみると、協力会の設立や恒例の観月祭に「林家たい平師匠」をお招きし賑やかに、楽しく出来ました事や「勉強会」では屋台や秩父の歴史等について学び「献血会」「交通安全教室」更に「ははその杜落語会」「絵画展」等々文化事業も手がけられました。これらの事業も目的の「マチづくり」の一翼を荷えたと思います。一番の思い出は、氏青協全国大会京都大会に、一泊四日のハーデスケジュールで参加したことです。総会後山口良治氏の講演に出席し一二〇〇人との懇親会に参加し、中に東京大会で知り合った方々との再会もよい思い出となりました。このように事業を通じて仲間作りが出来ましたことに、改めて感謝申し上げます。

最後に、秩父神社と共に、武島新体制の氏子青年会が益々ご発展されます事と、会員の皆様方のご健康とご活躍をご祈念申し上げまして退任のご挨拶とさせて頂きます。



氏子青年会前会長 今井 祥介

去る五月二十三日、平成十四年度秩父神社氏子青年会総会に於きました、会員の皆様の御承認を頂きまして会長を退任いたしました。一期二年でした会員の皆様はもとより宮司様はじめ職員の皆様、関係各位の皆様の心温まるご支援、ご協力により大過なく大任を務められましたことに感謝と御礼を申し上げます。

私は、二〇世紀から二十一世紀と世紀を超えての就任で



この度、秩父神社氏子青年会第五代目会長に就任致しました中村町の武島利夫です。宜しくお願ひ致します。日頃から氏子青年会活動に対しまして温かいご理解ご協力ご支援をいただきまして誠に有り難く厚く御礼申し上げます。当会も発足以来十数年が経ち、役員世代も平均年齢が十数歳の若返りとなりました。とは申せ先輩から継承した氏青活動に真剣に取り組みながらこの不景気のなか、氏青全員が協力をしてもらいたいと考えています。歴代の会長が統けてこられた事業はもとより、武甲山登山の復活や境内で使用させて頂いてのイベント、などなど事業部を中心企画してまいります。何分不慣れな会長ですが、どうぞ皆様のご指導ご協力ご理解を賜りたく存じます。多くの皆様から素晴らしい氏青会に成長したと言われますよう頑張りますので宜しくお願い致します。退任されました今井前会長にご慰労申し上げますとともに、簡単ではございますが氏子青年会の会長就任挨拶に代えさせて頂きます。



能面翁「白式尉」奉納

五月二十八日 日本伝統芸術家協会理事長であり面打の小倉宗衛氏より翁面「白式尉」一打ちが奉納されま  
ご神前において奉納式が斎行されました。

能「翁」は能にして能にあらず  
と言われ、特別な祈りを意味する儀式能とも言われています。一般的に「能」は「演じる」といいますが、この「翁」の場合は「務める」と言はれ、かつてこの「翁」を務める役者は、七日間精進潔斎し（現在では前日一日のみ）「別火」と言つて家族とは別の火で調理した食事をとする決まりがあつたそうです。そして、現在でも「翁」上演中は、樂屋の各部屋に清めの「別火」が置かれている  
そうです。



柿堺欣一郎先生歌碑除幕式



権禰宜 新井君美(39)

柿堺先生は、大正四年秩父市に生まれ、國學院大學卒業後、主として埼玉県立秩父高等学校の国語教師として永年に亘りお勤めになりました。昭和三十二年より、秩父万葉の会をはじめ、秩父市図書館、桟学園、さいたま市立本太公民館、秩父市立中央公民館、長瀞町立公民館などを会場に、万葉集・源氏物語・古事記などの講座を担当され、現在に至っています。

この度秩父市上町にお住まいです。地元で著名な歌人、柿堺欣一郎先生の歌碑が、神社下境内に建設され、その除幕式が平成十四年四月十四日斎行されました。

く存じますので、氏子崇敬者の皆様には、従前同様、ご指導ご鞭撻を賜りますよう宜しくお願ひ申し上げます。

の神社本庁へ出向いたしております。したが、このたび縁あって、当社権禩宜としてあらためて奉職させさせて戴くこととなりました。本庁在任中は、教学研究所をはじめ、森前首相のいわゆる「神の国」発言で有名になりました神道政治連明会に籍を置き、神道に関する調査・研究、また様々な国民運動に従事して参りました。今後は、当社内に事務所を置きます社団法人秩父宮会の事務局を兼ねつつ、一神職

昭和38年6月13日生  
皆野町下日野沢在住

※本報の用紙はグリーン・ユト  
リコマット100の再生紙を使用  
しています。

平成十四年(2002)七月三十日  
編集発行 秋父神社社務所  
〒366-0044 球磨郡秋父市番場町一-13  
TEL(0949)22-1026二  
FAX(0949)24-1559六  
有限公司 拡文社印刷所

■子供たちの元気な声が秩父の里に響き渡る川瀬祭りを迎へ、ここに社報「柞乃杜」第25号をお届け致します。

■今年は、日本・韓国共催によるサッカーワールドカップの年となり、日本代表チームもベスト16に進出するなど、日本中が熱気と興奮に包まれました。その日本代表の胸に輝く、三本足の八咫鳥。神武天皇東征のおり、熊野から大和に入る険路の先導したという大鳥です。

■この絶険路の行で知られる熊野修験は授け行をえた者に、証として櫛の葉が授けられます。当社境内にも櫛が献木が植えられていますが、櫛の葉には災難除けの力があり、お祇園との関係も深く、牛頭天王が后を娶るため南海に向かう途中、大変貧しい蘇民将来の家で一夜の宿を借り、そこで「なぎ」の葉に盛った栗をご馳走になりました。しかも家来全てにまで行き渡らせ、その厚いものなしに感動した牛頭天王は、蘇民将来の子孫には疫病や災いが及ばない様に護符をさしつけたと云われます。

■秩父の子供たちも、天王さまのご加護により、この厳しい夏を乗り切り、大きく成長してもらいたいと願います。

編集後記